

初夏の深入山を歩く 松田裕子

五月、家族で東北の深入山、八幡高原へ行きました。深入山は美しい草原の山です。初心者向けの山ということで、軽い気持ちで登ったものの、足をガクガクさせながら、ようやく頂上に立つことができました。若葉で輝く景色の中で食べるおむすびの美味しかったこと、よい思い出となりました。

そこらちゆう立夏の風や樫林

走り根に腰掛けてる夏の山

滴りに近づいてゆく森の中

岩清水岩のかたち流れ変へ

夏山のとつへん望み岩に立つ

山頂に立てば囀り足元に

登山靴の足投げ出して岩の上

新緑の山また山が国ざかひ

夏山の遙か向うは日本海

湿原の本道越ゆる夏の蝶

《作品鑑賞》

暁子

初夏の爽やかな季節に囲まれた登山です。深入山は秋同様、新緑の季節も又格別です。

そこらちゆう立夏の風や樫林

「立夏の風」「樫林」の取り合わせが素晴らしい。「そこらちゆう」が清々しさの広がりを一層増幅しています。

登山靴の足投げ出して岩の上

「足を投げ出す」は軽い疲れと共に達成感もあったのではないのでしょうか。作者の様子が目に見えるようです。

新緑の山また山が国ざかひ

頂上から置なわる山々を一望し、あの辺りは？など想像しています。全句に初夏の爽やかな山歩き感動が溢れています。

俳句と私 森口良樹

役所を退職して十年が過ぎた。この間、何か目的を持ち、それに向かっていたわけではない。強いて言えば、心筋梗塞で手術を二度受けたこと、ひよんをことから俳句を始めたくらいである。術後に、医師から散歩がリハビリに最適だと指導を受けた。毎日一定のコースを巡るのが、私の句づくりの時間でもある。日々の季節の移ろいを肌で感じ始めたのはこの頃からだ。これからの余生を、ゆくり近所を散歩しながら俳句を楽しみたい。

白鷺や中洲の風を背に受けて

けばけばしき声して鷺の巣籠れる

鳶尾草の角を曲がれば我家見ゆ

オリーブの花の屑寄せ風の吹く

バス停に日の差してをり青景雨

雨垂れに低き音して青芭蕉

片蔭をいつもの刻に辿りたる

お社の猫に会うたる日の盛

今日もまた噴水上がる午後三時

短冊に十句揃へて夏の夜

《作品鑑賞》

村上正人

ひよんなことから俳句を始めたとおっしゃる森口良樹さん。先に俳句を楽しんでおられたお兄様からのお声掛けがあり、俳句を始められたとのことである。大変お忙しいお仕事を退かれた今、健康維持の散歩から素敵な句が生み出されている。

鳶尾草の角を曲がれば我家見ゆ

一巡りの散歩も終盤に近づけば、角から「我家」が見える。そこに咲く「鳶尾草」から、馴染みの近所という感が伝わる。

お社の猫に会うたる日の盛

お社の猫に「会う」という表現が面白い。目が合ったとしても、おそらく日の盛の猫は寝そべり、動かないのである。

今日もまた噴水上がる午後三時

今日も時刻通りに上がる噴水に、しばし暑さを忘れる。散歩の順路にひと息つける季節ごとの場所があるのかもしれない。